

# 今を 読み解く

日本総合研究所主席研究員

藻谷 浩介

「今」から未来をつくる  
著者 藻谷 浩介



## 虫とゴリラ

養老孟司  
山極寿一

毎日新聞出版

「コロナ禍で日本は変わる」のか？

そのように語る方には、「あなた個人、御社自体は、この機会に何を变えますか？」と問いたいです。自分や自社がまず何かを変えないで、日本の何が変わるのだろうか。

日本は変わらなくてはならない社会だ。「契約は署名が原則。記名捺印は特例で認める」と、昭和以前から法律には書かれていたのに、令和になっても捺印のために出社する人がいた。コロナ禍でも喫煙者は煙を吸い続けたし、接待型飲食業に通う人は通い続けた。テレワークの試行など考えもなかった企業の方が圧倒的多数だ。

### ●自己変革の好機

コロナウィルスは、大都市の過密状態に警鐘を鳴らしている。国内の死者の3人に1人は都民だ。特別区部では、人口に占める陽性判明者の比率が全国平均の4倍近い。港区だと9倍、新宿区は16倍だ。過密の中で暮らすこと自体に高いリスクがあることが、改めて明白になっている。

しかしこれをもって、「東京が普通で田舎は過疎だ」という国民的思い込みは変わるだろうか。「東京は、過密で田舎は、過疎だ」と、皆が口にする日は来るのだろうか。日本的な情性は、急には改まらない。

だが希望は漸進の中にある。この機会に禁煙に踏み切る人も、喫煙者の1〜2%はいるかもしれない。住まい方や働き方を変えようと

## コロナ後のまちづくり

### 「自分が変わる」を出発点に

決めた人も、1〜2%はいるかもしれない。都会から若者呼び込むべく自己変革に進む自治体も、1〜2%はあるかもしれない。

「コロナ禍で「日本が変わる」のではなく、「自分が変わる」こと。1〜2%が静かな冒険に踏み出し、「変える」べきものをじっくり変えていくこと。その遠い先に、いつのまにか日本が「変わって

る」瞬間がある。

### ●若者根付かせる

『きみのまちに未来はあるか？』（除本理史・佐無田光著、岩波ジュニア新書・2020年）は、これから進学ないし就職する若者向けの本だが、特に地方を知らない大都市育ちに手に取ってほしい。著者も、首都圏で生まれ外に出た40代の研究者だ。過疎地にこそ、都会や大企業に欠落した「価値」

があるという彼らの気づきには、人生の真実がある。

『半農半林で暮らしを立てる』（市井晴也著、築地書館・20年）は、都会で働く自分の先行きに疑問を持った若者の必読書だ。過疎地の農林業が、いかに頭を使う仕事か、いかに自分らしさの発揮と働いた実感を伴うか、いかに長寿時代にふさわしい一生モノの仕事か。著者やその伴侶ほどの行動力はなくとも、小さいことから変え

ていく道は用意されている。

『観光亡国論』（アレックス・カー・清野由美著、中公新書ラクレ・19年）と『世界のコンパクトシティ』（谷口守編著、学芸出版社・19年）は、若者受け入れを狙う側の地域の政治家や役人や経営者が、必ず目を通すべき本だ。前者は、真の国際化を通じて自地域の本当の価値に気づき、「フランケンシュタイン化」を回避せよと警鐘を鳴らす。後者は、公共交通網を整備した適度に小さめの都市が、巨大都市以上に人材を引き付け文化力と経済力を増していくという、21世紀の世界のルールを示す。これらを理解せずして、令和の感性を持つ若者を地域に根付かせることはできない。

最後になったが「虫とゴリラ」（毎日新聞出版・20年）は、養老孟司と山極寿一という総合知の巨人の対談だ。本稿の文脈で重要なのは、自然に触れ合う機会なく育つ子どもの危うさの指摘だろう。人間が、触覚や嗅覚を置き去りに、言語として情報化された範囲だけを知覚して育つとどうなるか。若葉と花の織り成す美しい春の山を見ても何も感じず、「乱雑で解釈するAI（人工知能）のような人が増えていきかねない。自分あるいは子どもがAI化しつつある」と感じたあなたこそ、言葉抜きの自然に取り囲まれ、ひたすらに感じるしかない世界に、わが身を解き放つ必要があるだろう。



「自分が変わる」の遠い先に、いつのまにか日本が「変わっている」瞬間がある イラスト・よしおか じゅんいち